



遙かなる北アイルランド：現代英米詩研究会訳『  
マルドゥーン詩選集-1968-1983』，国文社，1996年  
。299項。

著者	田口 哲也
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	68
ページ	373-378
発行年	1997-03
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001805">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001805</a>

## 書評

### 遙かなる北アイルランド

現代英米詩研究会訳 『マルドゥーン詩選集—1968-1983』, 国文社, 1996年。299頁。

田口哲也

これはポール・マルドゥーン (Paul Muldoon) の *Selected Poems 1968-1983* の訳詩集である。フェイバー社からこの詩選集が出版された時、詩人は35歳であったという。マルドゥーンは1951年生まれの北アイルランド出身の詩人である。北アイルランド出身の詩人というと95年にノーベル文学賞を受けたシェイマス・ヒーニーが有名であるが、アイルランド詩の現況はとにかくものすごい。1996年のT・S・エリオット賞のパーティーに出席したジョン・ウォルシュは、パーティーがアイルランド詩人によって占拠されたかのようであると伝えていた。(The Independent, 18 January 1996)

マルドゥーンはベルファーストのクイーンズ大学に学んだ後、BBC北アイルランド支局にプロデューサーとして勤務する。1971年に *Knowing My Place* を出版する。彼はヒーニーやマイケル・ロングリーという、先行する偉大な詩人の作品をベルファーストで読みながら育った。

現代英米詩研究会は1994年にすでに *Meeting the British* の全訳を含む『ポール・マルドゥーンとの出会い——北アイルランド詩の現在』(国文社)を出版している。詩は「商売になりにくい」と敬遠されがちで、ましてや外国の詩の翻訳出版は大変困難な状況にある。しかし、よい作品はいつの時代でも翻訳されるべきであり、外国文学者の仕事は孤独な定観測者の仕事に似ている。外国詩の翻訳の時代は終わったのかとさえ思えるような状況の中での本書の価値は大きい。

コメントを始める前にまず実例をひとつあげてみよう。どこからでもよい

のだが、「父さんの通夜」という、真面目なのかふざけているのか（その両方なのでしょうが）ちょっと目には判断がつかないような作品を引いてみよう。

ぼくと父さんは ウーナ川で  
トゲウオを釣っている  
トゲウオはぼくたちに正義の味方のような気にさせてくれる  
川に投げ返してあげているのだから  
ぼくたちの慈悲深さは誰が聞いてもびっくりするようなものなのだ

父さんが浅瀬に入って立っていた時  
突然ぼくは思った  
トゲウオが実はピラニアで  
川が赤いじゅうたんになって  
父さんがちょうど立っている所から広がってしまったらどうしよう

いやひょっとしたら父さんはもう死んでいるのかな 眠っているのかな  
もし死んでいるなら  
この場所をひっそりと安全な墓にしてあげよう  
川の流れをずらして  
父さんを川底にねかせて また川の流れを元の所に

誰もとやかく言わないだろう

父さんが宝物をたくさんもっていたことや この川の王様だったこと  
そして大物の魚はるか下流にいるんだよと言っていたことを

この詩を読んでいて、もう25年以上も前のことであるが、内村剛介の手によ

るエッセーの詩集を初めて読んで感動した時のことを思い出した。アングロ・サクソンのビジネス文明によって滅ぼされてしまった父と子の絆が描かれているのだが、それだけでも奇跡的であるのに、詩人の思念は現実のある一点から自由に時空を駆け抜けていく。浅瀬に立っている父親がいつの間にか血の海に沈んでいき、ふたりが釣りに耽っていた川は父親の墓となるのである。

ロンドンのアイルランド人二世である、セックス・ピストルズのジョニー・ロットン（ジョン・ライドン）は最近出版された自伝の中で、「言語を奪われたアイルランド人が拠って立つのは記憶なのであるから、アイルランド文学から意識の流れという手法が広がっていったのは当然だ」というようなことを言った。(John Lydon, *Rotten: No Irish, No Blacks, No Dogs*, London: Coronet, 1994) アイルランドの詩人は記憶という無限のファイバーを自由に時間の中に、あるいは空間に伸ばしてゆく。記憶は一代限りのものではない。父親、母親、祖父、祖母、叔母、叔父、その他の親戚だけでなく、ふらりと家に立ち寄る近所のおじさんやおばさんから耳にした話は直接経験となって詩人の肉体に蓄積されていくのである。例えば、詩人の記憶はサラ伯母さんの農場でのある一日を我々の前に引っ張り出してくる。雇われて豚をつぶしにやってくる「皮剥ぎネッド」がナイフの血を拭き取った後で、伯母さんの膝の上にいる「ぼく」にこう言う。

「痛くないんだ きみが思うほどにはね  
 神さまっていうもんは一方のドアを閉めるときには  
 もう一方のドアを開いたままにしておくのさ  
 こいつら豚たちには風が見えるってわけよ」 (「皮剥ぎネッド」)

いまのアメリカ人やイギリス人が父親や母親の昔話をどれほどまじめに聞くであろうか。いや逆に父親や母親は子供たちに聞かすことができるような話

もっているであろうか。よく言われるように、テレビが出来たために家庭での会話がなくなったのではない。もともとなくなっていた家庭での親子の会話、その耐え難い沈黙を埋めるためにテレビが生み出されたのである。近くの川にいけば魚が釣れるのに、テレビで釣りの番組を見るようなバカはアイルランドにはそれほど多くないということであろうか。

ところで、この訳詩集の言語に震撼させられたのは、訳者たちがマルドゥーンの語りの内側に入り込み、そしてそこから日本語を携えて再びこちら側に戻ってくるという離れ業を演じたからに他ならない。その内側に入っていく難作業は100頁を越す改題と注によく現れている。とりわけ本書の掉尾を飾る「人の欲にはキリがない」の改題と注は、研究会の現場の雰囲気伝わってくるようで圧巻である。しかし本書の本来の価値は訳詩の日本語の読み易さにある。素晴らしい訳詩が誕生するためには原詩が優れていること、原詩に普遍性があることが必要であるが、この2つの条件を備えた原詩をぶち壊すような訳業を数々見てきた者にとっては本書に収められた46篇の詩と2つの俳句の訳はまさに地獄で仏の観がある。

マルドゥーンを捕らえた現代英米詩研究会のアンテナの鋭さ、確かな読み込み、そして日本語による見事な再表現に加えて、マルドゥーンの詩人としての普遍性がこの新しい日本語の詩集の誕生に寄与しているのも否定できない。例えば南北戦争を歌った「野戦病院」の一節を引いてみよう。南軍にも北軍にも与しない、ただ黙々とメスをふるう医者には「冷血漢も熱血漢も銃をぶっ放すということに関しては何の違いもない」と思っているのだが、それでも時々自分の無力にくじけそうになる。いや、自分を見つめ直すことを止めようとしないう方が適切か。

我々のテントに運ばれてきたこの女の子

この子の体から除去してやった

銃弾をジョージがこんどの休みの日には

釣糸の先につける重りに使うだろうけれど  
麻酔をかけてと泣き叫びながら死んでいったこの子は  
我々がそれでも無実なのだと伝えてくれるだろうか  
ジョージがカンテラに火をつけると

あの巨大で黄色い蛾が  
女の子の傷をかすめてとびこんできて  
我々の上着の袖にくっついた  
まるで勇者に与えられる勲章のように

女の子が死んで、真っ暗になったテントの中。相棒がカンテラに火を付けると、赤く燃え上がった炎に向かって大きな蛾が飛び込んでくるが、蛾は2人の医者に絡みつく。徐々に暗くなっていったテントの中で息絶えた女性。瞬間に明るくなった室内に飛び込む黄色い昆虫の生々しさが見事なコードを構成するのだが、同時にこのイメージは次の展開の助走にも思える。この何ものにも捕らわれない、マルドゥーンの逞しい想像力が訳者たちに言葉を紡ぎ出させたのではないかと思えてくる。

本書の中で繰り広げられる、アイルランドと日本の優れた才能どうしの幸福な出会いを目撃して、優れた作品とは手先の技術からではなく、生身の身体との接触によって生み出されるものであると思った。いくらカンナの刃が鋭くても、いい鱈が捕れなければ上質の鱈節はつくれない。この電腦時代においてこのようないわば「接触文化」の可能性が残されていることを示した本書の価値は大きい。かつてケネス・レクスロスは、書く動機があるところに作品が生まれるのだと言った。北アイルランドの状況は厳しい。いや、ずーっと厳しかった。「アッシュリリング」は性病検査のために訪れたベルファーストの病院で、ハンガーストライカーの姿を目撃するという構成に

なっている。詩人はこのように意外な展開の中で北アイルランドの困難な問題を浮き立たせる。

*The Run of the Country* というアイルランド映画があるが、この中で主人公の親友が彼の目の前で不慮の死を遂げる。主人公は葬儀に出掛けてこの親友がIRAの戦士であったことを初めて知る。くどくなるので大きく端折るが、何重にも引き裂かれたアイルランドでは、人は突然のように深い裂け目に転落し、深淵を通り抜けてものすごいスピードで異世界へと転送されてしまう。だからこそロリー・ギャラガーやゲーリー・ムーアのブルースギターには神憑りのドライブがかかり、ヴァン・モリソンやメアリー・クックランのボーカルには地球のものとは思えないような磁力が発生するのではなかろうか。マルドゥーンは詩の中で時空を飛ぶ。それは飛躍などという生やさしいものではない。本書の中で44頁にわたって訳出されている長詩「人の欲にはキリがない」は、かつてのアレン・ギンズバーグの「吠える」に匹敵するほどのインパクトを持っていると思うが、私は、チャールズ・ブコウスキーを思わせるような、さりげない日常の中での激しい自己分裂を冷静に見つめるマルドゥーンにも強く惹かれる。

なすがままにされる女たちの  
 眼の中を覗き込み  
 彼女たちが純粋な喜びを求めて悶え  
 呻くのをよそに

彼は涙を流す あの小さな農家の少年  
 オートミール色をしたラビラドル犬を  
 両腕に抱え  
 悦楽の極みを知っていた少年を思つて (「プラン」)